文学、東京散歩

柴田宵曲

文学・東京散歩

団子坂

江戸時代には巣鴨の菊見はあっても団子坂の菊というものは無かった。団子坂の通が広くなったのは、大正初年と記憶するから、団子坂の菊人形なるものは、明治に限られた現象と見て差支え無い。

自来也も蝦蟇も枯れけり団子坂　　子　規

等という句も、何を詠んだものかわからなくなる時代が、そのうちに到来するであろう。

二葉亭の「浮雲」の二篇には団子坂の観菊という章がある。例の錯綜した人事の中に介在するので菊人形の描写はそれほど多くもないが、イヤ出たぞ〳〵と列挙する男女の風俗は、正に当時の風俗画と見るべく明治二十年頃の団子坂の盛況が思いやられる。

漱石の「三四郎」は明治四十一年だから、その間に二十年を経過しているが、あの中に出て来る団子坂もなかなか賑やかであった。併し「見物は概して町家のものである。教育のありさうなものは極めて少ない」とある。「あれ程に人工的なものは恐らく外国にもないだらう。

人工的によくも斯んなものを拵へたといふ所を見て置く必要がある。あれが普通の人間に出来て居たら恐らく団子坂へ行くものは一人もあるまい。普通の人間なら、どこの家にも四五人は必ずゐる」という広田先生の説は漱石の菊人形観と見てよかろうと思う。

三四郎が美禰子と二人で出た小川のほとりは、大分前に暗渠になってしまった。此事を踏えて「団子坂」という対話を書いたのが鷗外である。四十五頁の短いものだけれども、作者の居宅に近いだけあって、ちょい〳〵あの辺らしいものが取入れてある。

鷗外の観潮楼は団子坂の上をちょっと左に曲った右側にあった。この家の近所の模様が「二人の友」の中に少し書いてある。団子坂の菊人形が見られなくなった大正の初年、白山上の中学に通う友人から、時々馬上の鷗外さんを見かけるという話を聞いた。

中坂

九段坂の鄰にある中坂が日本近世の文学史に重要な関係を有することは、已に内田魯庵が「硯友社のむかしの

憶出」の中に詳しく書いている。曲亭馬琴が一生の大部分を暮したのがこの中坂下の家で飯台陳人などというと何だか高い処に住んでいたような感じを与えるが、実際は坂下の平な処にいたのである。

読売新聞の寄書家として知られた中坂まどきが、この坂に住んでいたからの名であることは云うまでもないが、現代人の記憶にとゞまって居らぬであろう。石橋思案がこの後から出て、中坂思案外史、或は飯台思案外史と号した。思案の住んでいたのは中坂より少し離れた処だそうだが、硯友社が小さい標札を掲げて、その存在を

知られるようになったのは、この中坂上だという。――以上は皆魯庵の請売に過ぎない。

馬琴の旧宅に就て書いたものはいくらもあると思うが、今頭に残っているのは高安月郊の「馬琴の井戸」という文章である。能楽堂で八嶋の能を見た帰りに、ふと思いついて中坂下をたずねて見る。そこには縁の腐れた井戸があった。側の水道を汲む女に聞くと、滝沢という家が目の前にあって、「タキサワ」という電灯が出ている。併し家は新しい。昔からのものは井戸だけらしいというのである。大正二年の話だから、まだ遺蹟の高札は

立っていなかったと見える。馬琴の娘婿の家が小さな瀬戸物屋を開いていたという魯庵の話はそれより大分前になるのである。

中坂の中途に望遠館という宿屋があった。こゝに赤木格堂が居り次いで松根東洋城が陣取った。東洋城は自分を中心とする明治俳壇の歴史には「望遠館時代」というものを除くことが出来ぬと云っている。此等は明治としてもよほど後の方の話で、中坂の文学としても新しいもののように考えていたが、今日になって見れば全く回顧談中の世界である。

植物園

寺田寅彦の名は科学者としてよりも先ず文学上に現れた。「ホトトギス」の百号（明治三十八年四月）に出た「団栗」が最初の作品で、三重吉の「千鳥」ほど華々しくはなかったけれども、寅彦の特色は已にこの一篇に遺憾なく発揮された観があった。病余の細君と一緒に小石川の植物園に遊ぶところが全篇の山であり、細君の歿後六つになる遺児を連れて同じ場所に遊ぶ一条を以て之を結んでいる。母の面白がって拾った団栗を遺児も亦面白がっ

て拾う、それがこの題名の生れる所以であるが、植物園を題材とした作品で、これほど短い中に無限の情味を湛えたものは、前にも後にも無いかも知れぬ。

この作者は当時小石川の原町に住んでいた。植物園とは地理的にも深い因縁がある。「団栗」より大分後に出た「やもり物語」のはじめに「毎年夏始めに、程近い植物園から此わたりへかけ、一体の若葉の梢が茂り黒み」云々とあるのも、この環境から自ら生れた描写である。但「やもり物語」にはあの附近の空気が巧に描かれているだけで、植物園には一歩も踏入れてない。

北原白秋に「植物園小品」という、珍しく文語体で書かれた散文がある。散文とはいうものの、感覚的な文字を縦横に駆使した小品で、内容は詩と異るところが無い。全体の空気も「団栗」などよりは余程ハイカラである。「紫のパラソルつよく日にひかる植物園の昼のすずむし」という歌は、この小品とは違った時の作らしいがやはり同じような空気を伝えたものである。

森鷗外の「田楽豆腐」の後半にも植物園が出て来る。西洋草花の名を知ろうと思って出かけて来たところ、市中で売っているような西洋草花は殆ど見当らず、且名前

を書いた札も立ててない。あの名前を書いた札が田楽豆腐の形に似ているというので、この小説を「田楽豆腐」と題するのであるがちょっと内容の見当がつきかねる題のつけ方である。

神田橋

箱根の山は天下の嶮、と同じ節で歌われた「何だかんだの神田橋、朝の五時頃見渡せば……」という流行唄があったのは、明治の末年かと記憶する。今では多分誰の

脳裏からも消え去っているのであろう。破れた袴に弁当箱を提げて、テクテク歩きで役所へ通う腰弁街道も全く往年の景観を改めてしまった。

二葉亭の「浮雲」の冒頭に「千早振る神無月も、最早跡二日の余波（なごり）となツた二十八日の午後三時頃に、神田見附の内より、塗渡る蟻、散る蜘蛛の子と、うよ〳〵ぞよ〳〵湧出でゝ来るのは、孰れも顋を気にし給ふ方々」云々とある以下の描写が、この腰弁街道の描写として最も古いものであろう。

「浮雲」の第一篇が出た明治二十年から三十年後に芥川

龍之介が「毛利先生」を書いた時、偶然神田橋を冒頭に持出した。二葉亭が使った「神田見附」という言葉が疾くに消滅している代りに「腰弁街道」という言葉が新に点出された。「自分たちの左右には昔嶋崎藤村が「もつと頭をあげて歩け」と懐慨した、下級官吏らしい人々が、まだ漂つてゐる黄昏の光の中に、蹌踉たる歩みを運んで行く」という描写は、三十年を隔てて「浮雲」の冒頭に通うのである。

「もつと頭をあげて歩け」と藤村が慷慨したというのは「並木」という小説である。

明治四十年六月の「文芸倶楽部」に発表した。その短篇の末尾に至って主人公が腰弁街道の光景を望み、「もつと頭を上げて歩け」と独語して涙を落すというのであったと思う。

漱石山房

ロンドンから帰った漱石が第一に居をトしたのが本郷駒込千駄木町五十七番地であった。この家の写真は「漱石写真帖」に出ている。「道草」のなかに描かれている

のはこの時代の生活であろう。明治三十六年三月から三十九年末まで居住とあるから、「吾輩は猫である」は勿論「漾虚集」「鶉龍」に収められた短篇は皆この家で成ったのである。漱石の生涯を通じて最も創作力の旺盛な時代と云えるかも知れぬ。

この家の持主が斎藤阿具博士なので、博士が仙台から東京へ転任するに及び、他へ移らなければならなくなった。この移転直前に「野分」を書いている。三十九年も押詰った十二月二十七日、西片町十ろノ七に移った。「三四郎」の広田先生の引越先はへノ三である。あの引越の

条は多少この時の事が取入れてありそうな気がする。

こゝに来てから朝日入社の事がきまり、大学の職を一擲することになった。朝日の主筆池辺三山が訪ねて来たのを二階に通して「少し誇張はあるが、大仏を待合に招じたと同様に不釣合な感を起した」と云ったのはこの家である。当時二葉亭も西片町に住んでいて、銭湯で一緒になることなどもあったらしい。

漱石はこゝで「虞美人草」を書き上げ、四十年の九月二十九日に早稲田南町七に移った。「文鳥」の書出しに「十月早稲田に移る」とあるのは、一日二日の事だから

十月にしてしまったのであろう。これが誰も知っている漱石山房である。

爾来漱石の作品は悉くこの家の「伽藍の様な書斎」で生れた。温泉へ行って小説を書くような人でなかったから、余所で書いたものと云えば胃腸病院で稿を起した「思ひ出す事など」位のものかと思う。最後の漱石山房の模様は漱石自身の書いたものに出て来るし、門下の手に成ったものもいろいろある。芥川龍之介は「漱石山房の秋」で漱石生前の様子を書き、「漱石山房の冬」で歿後改築されてからの模様を書いていた。

今度遺跡に指定されたのは千駄木町の家である。早稲田は戦災に亡びてしまった。西片町は短期間であり、写真帖には出ているが、今どうなっているか知らん。

大川端

小山内薫の「大川端」は、別々に書いた三つの小説を纏めて一の長篇にしたもので、作者の意図は後に書いた「落葉」及「鏡台前」を併せて三部作とするに在ったという。他の二部は姑く措き「大川端」だけに就て見ても、

これほど大川端の空気を描き得た小説は他にあるまいと思われる。但この小説の大川端は中洲から代地に至る間が主で、稀に水神あたりが舞台になる位のものに過ぎぬ。「乞食」という短篇も「大川端」時代の片影らしいが、これに出て来るのも亦同じ世界である。大川端というのはこの範囲に限られているわけではない。

芥川龍之介が学生時代に書いた「大川の水」という随筆は「自分は大川端に近い町に生まれた」という一句にはじまっている。この大川端に近い町は即ち本所のことなので「家を出て椎の若葉に掩はれた、黒塀の多い横網

の小路をぬけると、直あの幅の広い川筋の見渡される、百本杭の河岸へ出る」とある。この作者は「大川端」のように、本所を背景とした作品をあまり残していない。「奇怪な再会」とか「妖婆」とかいうものが本所を舞台にした梢々長い部類に属するであろうが、これは大川端と没交渉である。たゞ「開化の良人」の主人公は百本杭に近く邸宅を構えていた関係から、この小説の中には大川端という言葉が散見するのみならず、最後に柳橋の舟宿から大川へ漕出した猪牙舟の場面を用いている。「大川端」と違う方面の大川端を書いた小説の一例に挙ぐべ

きであろう。

「大川の水」の中には燬けた砂を踏んで水泳を習いに行くことが書いてある。夏毎に大川端に姿を現した水泳場なるものは、何時頃まで在ったかはっきりおぼえぬが、今日の人にはちょっと想像もつかぬであろう。吾妻橋から新大橋までに五つあった渡しのうち、駒形、富士見、安宅が先ず廃れ、一の橋から浜町へ渡る渡しと、御蔵橋から須賀町へ渡る渡しとが残っているとも書いてあるが、附記して一の橋の渡しの絶えたことを云い、御蔵橋の渡しの廃れるのも間があるまいと云っている。「大川

の水」を書いたのは大正三年である。大川の水に対して渡し舟を連想する人ならば、必ず大川端の水泳場を知っているに相違無い。

本所に育った斎藤緑雨が好晴の日に渡しを渡るのを楽みとし、用も無いのに彼方へ渡り、此方へ渡りするのを逸興とも安慰ともしていたが、一銭蒸汽が往来するようになって頓に興がさめたというのは大分古い事であろう。「横網も一銭蒸汽近づくと廻るうねりも君おもはす る」と北原白秋が詠んだのは、その一銭蒸汽がもう古びた存在になってからの話である。

向島

漱石の明治四十二年の日記にこんな事が書いてある。虚子が「続俳諧師」を書くとき予告を出して期日がせまっても何も書く事がない。とも角も向島を散歩しようというので散歩に出て、それを書いた。明日になっても明後日になってもまだ書く事がないので好加減に向島を引き延ばしたのだそうである。呑気な事なり。宜なり続俳諧師の冒頭十数回の振はざるや。夫を蘇峰が、今度のは大変面白い屹度評判になるでしょうと云ったそうだ。虚

子も能く出来ているが、蘇峰も能く出来ている。――

この話は森田草平も「自叙伝」か何かの中にちょっと書いていたかと思う。但この冒頭は作者自身削ってしまったから、単行本の「続俳諧師」を読んだのでは、能く出来ている所以を知ることが出来ない。

向島には依田学海もいた。饗庭篁村もいた。幸田露伴もいた。正岡子規も学生時代に一夏を桜餅屋の二階で暮して「七草集」というものを書いたことがある。篁村は「天地無窮の変化を測知ることをいまだ能くせず、向島に住みて洪水三度の難に遭ふは、治水の功聊か禹に及ば

ざる所あるに似たり」などと洒落ていたが、その後牛込へ引越してしまった。露伴は大分後まで向島にとゞまったが、結局去ることになった。東台墨堤と並び称された向島が、桜の名所たる実質を失ったのは明治四十三年の洪水以来である。それでも長い間の習慣は恐しいもので、春になると人が出る。沼波瓊音の「白日下の涙」に「今まで年々そこに集ふ群衆は、さも花を見に来る如く見えたが、実はさうでは無かつた」とあるのは、この花が無くなった後の向島の消息を伝えたのである。

紅葉の「三人妻」の中に十余人の艶婦を抱えた向島の

別荘というのが出て来る。露伴の「大珍話」にも、場所はわざと変えてあるが同じようなところがある。明治時代の読者ならば、一読して直に大倉の別荘を暗示したものと合点する書き方であった。今はそれに説明を要するほど古い話になったし向島の空気も変ってしまった。

阪本四方太の「向島」は百花園を見物して、言問団子に入って、ボートレースを見るだけの小品である。百花園も昔の面影は乏しくなったが、とにかく向島の一角に残存している。言問団子も洋館になって土手の上に出た。物皆移り行く世の中に、いさゝかなりとも過去の形見を

とゞめるものがあれば、それを以て可矣とするより仕方があるまい。

一葉旧居

樋口一葉が大音寺前を引払って丸山福山町に越したのは明治二十七年五月一日であった。「家は本郷の丸山福山町とて、阿部邸の山にそひて、さゝやかなる池の上にたてたるが有けり、守喜といひしうなぎやのはなれ座敷成しとて、さのみふるくもあらず、家賃は月三円也、た

かけれどもこゝとさだむ」と当時の日記に見えている。「雨の夜」の書出しに「庭の芭蕉のいと高やかに延びて、葉は垣根の上やがて五尺もこえつべし」とあるのもこの庭なら、亡兄の形見の硯を甥なる子が池に投入れたという「月の夜」の記事も、前の「さゝやかなる池」に当るのである。

一葉の文名はそれ以前から無いでもなかったが、この家に移って後――二十八年になってから頓に揚った。「にごりえ」はこの家の近くにあった商売屋を舞台に取ったので、大音寺前を描いた「たけくらべ」よりも、この方

が先に成っている。一葉がその附近の家に頼まれて「御料理仕出し」云々と千蔭流の筆を招牌に揮ったというのもこの家に於けるエピソードの一であろう。

この丸山福山町の家は四番地であったという。一葉はこゝで亡くなったのである。馬場孤蝶が明治四十五年に全集の跋を書いた時、この家は既に無かったのだから、今日からは全くたずねようもあるまい。家は四十三年の八月東側の高い崖が崩れた為、潰されてしまったのであるが、その時住んでいたのが森田草平であった。この事は漱石の「思ひ出す事など」の中に「妻が本郷の親類で

用を足した帰りとかに、水見舞の積で柳町の低い町から草平君の住んでゐる通り迄来て、此処らだがと思ひながら、表から奥を覗いて見ると、かねて見覚えのある家がくしやりと潰れてゐたさうである」と書いてある。

「草平君は半生から崖崩れを恐れて、出来る丈表へ寄つて寝るとか聞いてゐたが、家の潰れた時には、外のものは丸で無難であつたにも拘はらず、自分丈は少し顔へ怪我をしたさうである」とも書いてある。若しこの時住んでいるのが他の人であったら、一葉歿後十数年を経て、崖崩れに潰れた様子をこれだけはっきり知ることは困難

であったろう。不思議な因縁というべきかも知れない。

不忍池

詩人の所謂「小西湖」の称は、今の人には縁が遠くなった。吾曹先生として知られた福地桜痴が池の端に邸宅を構えていたなどということも、一部の回顧趣味者の興味を惹くに過ぎぬであろう。森鷗外の「雁」は、桜痴がいた時代の池の端を書いたものである。明治十三年というのだから、鷗外が「雁」の筆を執る時分にも已に「古

い話」であった。不忍池を舞台にした作品としては、第一にこの一篇を挙げなければならぬ。この小説の最後の山で、題名の由って来る所以でもある一段が、枯蓮の中に投じたつぶてが偶然一羽の雁に中る、日が暮れてからそれを取りに行って、不幸な雁の肉を肴に酒を飲むというところである。不忍池の様子も大分変ってしまったが蓮と水とがある限り「雁」に描かれた事実を想起せしむるものがある。

三十年近く時代が推移して、上野に勧業博覧会の開かれた明治四十年になると、「虞美人草」の夜景が浮び上

る。イルミネーションをうつした池を中心に、三人連と四人連とが偶然出会する。四人連の方では気がついたが、三人連の方は何も知らずに、紅茶を飲むという一節である。あの中に外国館として出て来る建物の名残は今でも存しているが、池を横切った観月橋なるものは、その後大分たってから無くなった。

不忍池を描いた文学は相当多数に上るであろう。小山内薫の「足拍子」にも、たしか不忍池のことがあった。「枯蓮にうすれし夕日影消えて水音寒く鴨ふたつ飛ぶ」（薫園）とか、「鴨啼いて灯火消すや長酡亭」（子規）と

かいう詩歌の類に及べば多々益々弁ずるわけである。正岡子規も学生時代に一時不忍池畔にいたことがあり、附近の飲食店の名を列挙しているが、蓮玉庵以外は殆ど皆亡びてしまった。その中の一つである氷月の汁粉のことは、内田魯庵も泉鏡花も随筆に書いている。紅葉山人のお供をして百花園へ行った帰り、鉄道馬車で上野へ出て、氷月の張出しの方で汁粉を三つ頂戴したのだという。まだ後年のように酒を嗜まなかった青年時代の鏡花の風丰の窺われる一挿話である。

不忍池畔に馬見所のあった話も今では大分古くなっ

た。その次に来たのが自転車競走、今の所謂競輪である。小山内薫の「大川端」の中に、木場の材木屋の主人公が不忍の自転車競走に出て、一等を取った記念にうつした写真というのが出て来る。あの主人公は実在の人物で、第一次「新思潮」の出資者だというから、この競走の話も多分事実であろう。明治三十年代の片影らしい。

観潮楼

鷗外が団子坂上に居を定めるに至った経緯は、自ら「細

木香以」の中に書いている。はじめ買取った時の家は三間に台所の附いた小さなもので、そのうちの三畳に反古張の襖が二枚立ててあった。反古は俳文の絵入紀行で、巻首に香以散人の半身像がある。香以が安政六年に書いた草稿らしかったということである。鷗外が後年に及んで香以の伝を草したのも、古くからいう因縁があるからであった。

観潮楼の名は遥に東京湾の水を望み得るところから来ている。それは長年この二階にいる鷗外が、ごく晴れた日に僅にそれと見得るだけのもので、馴れない人には絶

対に見えないのだという。結婚後間もなく夫人が、どうしても私には見えないと云ったら、お前は正直だ、自分がそう云うと成程見えますなどという人があるが、そんなに見えるわけのものではないと云って笑ったという話が伝えられている。併し「細木香以」には「今のわたくしの家の楼上から、浜離宮の木立の上を走る品川沖の白帆の見えるのは」云々とある。海の水は見えなくとも、帆影によって見当はついたのであろう。

鷗外の文学的生活は久しきに亙ったから、随分いろいろな人が観潮楼を訪れた。笹川臨風が斎藤緑雨の紹介で

訪問すると、緑雨の所謂母堂の首実検や口頭試問があって、然る後鷗外に逢うことが出来たと云っているのは、よほど古い話らしい。二葉亭も「舞姫」を露語に訳した後、一度たずねて来た。木下杢太郎が「南蛮寺門前」を書き上げた晩、雪を踏んで観潮桜を敲き、草稿の一閲を乞うたなどという話もある。「めざまし草」を賑わした合評会と云い、明星派と根岸派とを結びつけた歌会と云い、観潮楼の歴史は自ら明治大正文学史の一面をなす観がある。それらの訪問者によって書かれた観潮楼の印象を集めたら相当の分量に達するに相違ない。

観潮楼は鷗外の作品に無論出て来るが、そう多くはない。「青年」の第一回に「ふいと左側の籠塀のある家を見ると、毛利某といふ門札が目に附く」と外側から見たこの家の事を書いて、主人公の立場から自分を評せしめているのは、鷗外一流のいたずらである。

浅草

浅草に関する文学を限られた紙面で云々することは容易でない。現に浅草生れの人の手に成った、「浅草記」

（久保田万太郎）という書物が存在するほどである。以下は所謂浅草文学の圏外にこぼれた断片を二三拾い集めたに過ぎぬ。

芥川龍之介は「キユウピツド」という小品の中で、浅草という言葉は複雑であると云い、少くとも自分には三通りの観念を与えると云った。第一は観音堂中心の世界、第二は池のまわりの見世物小屋、第三はつゝましい下町の一部で、「浅草」の作者久保田万太郎君を感じさえすればいゝというのである（彼の晩年の作品「浅草公園」――或シナリオ――は無論この三つの世界を断片的に描いて

いる)。この小品の中で彼は一応昔の浅草に触れ、こういう昔の景色は先師夏目先生の「彼岸過迄」に書いてある以上、今更僕の悪文などは待たずとも好いのに違いないと云って片付けてしまった。漱石の浅草は慥に珍しい。「彼岸過迄」の主人公は祖父から聞いた江戸時代の浅草を頭に置きながら、浅草まで出かけて行って、帰りに蔵前で文銭占いの婆さんから身の上の暗示を受けるのである。

泉鏡花は「妖術」という短篇に不思議な浅草の一角を描いた。浅草行の電車に乗合せた女が手品師で、一緒に

入った小座敷で手品を見せる。標題だけ見ると如何なる幻怪的世界が展開されることかと思うが、実際はそれほどでもない。作者が作者だけに舞台は観音堂を中心とした第一の世界を離れぬことになる。

斎藤緑雨が「わすれ貝」の中で上野と浅草との比較を試みたのは明治三十三年であった。上野は築き成された公園なり、陰気なる神の庭なり、浅草は埋立てられた公園なり、陽気なる仏の宿なり以下各方面に亙って奇警なる比較を列記した末、最後にこう云っている。「以上は諸種の点より、開化の公園に二様あるを示したるの

み。比較の始めなり、判断の終りにあらず。敢て擱筆の便宜を得んがため、こゝに無用の一語を添へんか。上野行は緑ならざる可からず、浅草行は紅ならざる可からず、之を顚倒したるは、無智なる馬車鉄道会社の過失なり」――爾来五十年、上野も浅草も幾変遷した。緑雨の挙げた中には現在無くなったものもある。併し浅草なるものを鋭く概括的に捉え得た点で、あれほど簡潔な批判は他に類が無いかも知れぬ。

大学図書館

図書館というところは文学者に縁がありそうで存外そうでないらしく、従って文学的材料にはあまり用いられていない。一葉女史が屢々上野図書館に通ったことは日記に見えて居り、若き日の薄田泣菫がその姿を見かけたことがあると何かに書いていたが、これなどは寧ろ珍しい方の材料に属する。

漱石が大学を去って「朝日」に入った時、四年間の過去を顧みて「大学で一番心持の善かつたのは図書館の閲覧室で新著の雑誌杯を見る時であつた」と書いている。

大学に教鞭を執る間、度々図書館へ出入したのであろう。だから「三四郎」の中にも大学の図書館が出て来る。借りた本の見返しに「ヘーゲルの伯林大学に哲学を講じた時……」云々という長い落書が鉛筆で書いてあったというのは、事実であるかどうかわからぬが、どんな本を借りて見ても、必ず誰かの眼を通した痕跡がある、念のためアフラ・ベーンという作家の小説を借りて見たら、それにもやはり鉛筆で丁寧にしるしが附けてあるので、到底遣り切れないと思ったとあるのは、漱石自身の体験ではないかと思われる。

「三四郎」の時代を何年か若くしたのが芥川龍之介の「路上」である、あれは作者の大学生時代を書こうとしたのであろうが、遺憾ながら「三四郎」ほど手際よく出来上っていない。前篇だけで筆を擲ってしまったのは、作者自身も不満足であった為かも知れぬ。「路上」の中にも大学図書館の場面があるというよりも「路上」は大学の図書館からはじまるのである。但こゝで読む書物のことは出て来ない。「見上げるやうな大書棚が、何段となく古ぼけた背皮を並べてまるで学問の守備でもしてゐる砦のやうな感を与へてゐた」などと書いてある。

大学図書館にたて籠り、書斎よりもこゝで多くの筆を執ったこと沼波瓊音の如きは稀であろう。彼の異色ある「徒然草講話」はこゝで稿を起しこゝで書き了った。「白日下の涙」をはじめ、瓊音の作物に散見する図書館なるものは多く上野でなしに大学図書館のようである。彼は大学図書館の特別室を以て我が為の理想郷なりと云い、室内の様子、窓外の眺などを細叙している。大正震災より十年も前の文章だから、今の建物ではない。「図書館の吉野桜」という彼の長詩は、「新聞包みの麺麭、番茶入れし水筒」を携えて日々こゝに通う感慨を詠った

ものである。

大久保

さびしい田舎の、家の小さい、庭の広い、樹木の沢山ある屋敷に住みたいと云っていた小泉八雲は西大久保の売屋敷が全く日本風で近所に西洋風の家もなく、後に竹藪のあるのが気に入った。明治三十五年の大久保は大分田舎でものしずかであったから、この藪で頻に鶯の囀るのが聞えたそうである。これが八雲の日本で手に入れた

最初の家で又永眠の家でもあった。

国木田独歩が独歩社をやめてから移ったのも西大久保である。番地は何方の全集にも書いてないし、あったところで大久保村時代の番地では見当もつきかねるが、その家の写真は何方の全集にも載っている。独歩の家は竹垣をめぐらした茅葺屋根で、如何にも村居たるにふさわしい。彼はこの家で「竹の木戸」を書いた。居を定めたのが四十年の四月で、六月には湯ヶ原に病を養い、十一月には常陸国湊町に転じ、翌年二月には茅ヶ崎の南湖院に入るという状態であったから、実際の大久保生活は短

かったのである。

大町桂月が大久保に居を卜して「田園雜興」などという文章を書いたのも、多分この前後であったろう。当時の大久保は田園の称に背かなかった。「三四郎」の中に出て来る野々宮さんの家を見ても「踏切からすぐ横へ折れると、ほとんど三尺許りの細い路になる。それを爪先上りにだら〳〵と上ると、疎な孟宗藪がある。其の藪の手前と先に一軒づゝ人が住んでゐる」という調子で、この藪の下を轟と鳴って通るのが電車でなしに甲武線の汽車である。隔世の感があるとでも云うより仕方が無い。

岡本綺堂の「三浦老人昔話」は大久保に住んでいる三浦という老人から話を聞いて書いた形式になっている。その各篇のはじめにちらちらと姿を見せるのが明治の大久保の片影である。三浦老人は有名なる半七老人と同じく作者腔裏の産物に相違無いが、ここに出て来る大久保の片影の中には棄てがたいものが多い。その中に突如として、震災に家を焼かれて目白に逃れ、麻布に移り、更に大久保百人町に住むようになった作者の後年の事実談が顔を出す。この大正末の大久保のことは「郊外生活の一年」という綺堂の随筆に書いてある。震災後における

あの辺の変化は、正に三浦老人をして瞠目せしむべきものであったが、今度の戦災で又その上に輪をかけることになってしまった。八雲の旧居に少数の人が集って八雲忌の句を作るという話を聞いたのは何時頃であったろう。今ではもう夢のような記憶をとどめているに過ぎぬ。

田端

「三四郎」の中に佐竹の下屋敷を通抜けて道灌山へ出ようとすると番人が出て来て叱りつけたというところがあ

る。屋敷と云っても残っていたのは黒い門と庭だけであったが、あの一帯が後に日暮里渡辺町ということになった。その頃から道灌山の模様も大分変ってしまった。

道灌山は正岡子規に因縁の多いところである。高浜虚子を伴って勉学の必要を切言したこともあり、胸胞神社の傍で石井露月を送る柚味噌会を開いたこともある。明治三十二年の九月に腕車を駆って道灌山に遊んだ時は、「山は無き武蔵野の原をながめけり車立てたる道灌山の上」「婆々が茶屋はいたく荒れたり昔わが遊びに来ては柿くひしところ」などと詠んだ。然るにそれから二三年

にして子規は大龍寺に葬られることになり、

田端

虫聞くや子規の墓ある山続き　　鳴雪

という因縁を生ずるに至ったのである。道灌山社昔から虫の名所と云われていた。

道灌山が変化したと同時に田端という土地も一変した。芥川龍之介が「秋」の中で「町並が葱畑に移る近く」と云い「人通りの少い場末の町」と云った幅の狭い道も田端駅から動坂下へ出る広い道が出来るようになって、全く昔日の面影をとどめなくなった。東京人たるこの作

家は郊外というものを好まず自分の住んでいる田端もやはり東京の郊外だから、あんまり愉快ではないと云っている。併し「野人生計事」の中にある「東京田端」の一篇は、田端という土地及そこに住んでいた人々を伝える意味で看過すべからざるものであろう。

庭木に烏瓜の下つたのは鋳物師香取秀真の家。竹の葉の垣に垂れたのは画家小杉未醒の家。門内に広い芝生のあるのは長者鹿嶋龍蔵の家。ぬかるみの路を前にしたのは俳人滝井折柴の家。踏石に小笹をあしらったのは詩人室生犀星の家。椎の木や銀杏の中に

あるのは――夕ぐれ灯籠に火のともるのは茶屋天然自笑軒

此等の家も悉く戦災に亡びた筈である。芥川龍之介を記念する為に作られた「おもかげ」の中には、あの門前に到る道の写真なども入れてあったが、今日では田端の面影を偲ぶ資料にもなっている。

上野

日曜文学の徒と自ら称していた阪本四方太は、上野を

題材にして「椎の木蔭」を書き「動物園」を書き「博物館」を書いた。「月待」というのも上野の山王台で二十六夜の月を見る写生文である。いずれもなつかしい明治時代の片影であるが、こういう舞台が普通の小説に用いられる機会は少い。

「吾輩は猫である」の中に夜動物園の虎の声を聞きに往こうと云って、寒月君が苦沙弥先生を誘い出す条がある。深夜闇寂として四望人なく、鬼気肌に逼って魑魅鼻を衝く際に上野の老杉の葉を悉く振い落すような勢で鳴くのを聞くという趣向だけれども、果して聞き得たかどうか

は書いてない。正岡子規の歌に「上野山夕越え来れば森暗みけだもの吠ゆるけだものゝ園」というのがあり、偶然動物園の外から聞く獣の声を詠んでいる。こういう歌はあまり多くはあるまい。

漱石の「野分」には音楽学校の音楽会が出て来る。「三四郎」には絵画展覧会と精養軒の場面がある。夏の暑い晩に共同水道の水を浴びていたら巡査に見つかって擂鉢山へ駈け上ったというような暢気なエピソードも精養軒の会の帰りに出る。精養軒で食事をするところは鷗外の「青年」にもあったようである。巌谷漣が「妹背貝」を

書上げて吉岡書店から原稿料を貰った時、紅葉、魯庵と三人で精養軒へ午餐を食いに行った。食堂へ通ると傍のテーブルに岡倉天心が流暢な英語で外人と話しながらナイフとフォークを動かしていたなどというのは、それだけで明治の空気に触れる思がある。

芥川龍之介は「開化の良人」や「春」の中に博物館と表慶館とを使っているが、舞台を借用したというまでで、大勢に関係は無い。「お富の貞操」は上野の戦争を題材にした小説である。上野の戦争を扱ったものは珍しくないが、この小説では明治二十三年の第三回内国博覧会開

会式の当日、女主人公が上野広小路で往年の乞食を見かけるというのが余沫的な一の山になっている。勿論その時は乞食などでない。二頭立の馬車に坐った明治の大官の姿で現れて来るのである。

銀座

大正十年に銀座の柳が姿を消した時、資生堂で拵えた「銀座」という書物がある。今取出して見ると、執筆者の大半は故人である。柳だけは復活したけれども、震災

で全滅し、戦災で半を焼かれた銀座の現状を見れば、何よりもその後に於ける歳月の推移を考えざるを得ぬ。「銀座」の中にある「銀座の雨」という白秋の詩を読めば、震災以前の銀座の影が眼前に揺曳する。あの頃の銀座はハイカラではあったが、今のようなけばけばしいところは無く一帯の空気がもっと落著いていた。「薄あかり紅きダリヤを襟にさしシルクハットの老いかがみゆく」「いちはやく冬のマントをひきまはし銀座いそげばふる霙かな」――「桐の花」時代の白秋の歌にも当時の銀座が散見する。

吉村冬彦の「銀座アルプス」は銀座に関する随筆中、最もすぐれたものの一であろう。斯人と銀座との因縁は意外に古く、明治十八年頃まで遡る。その時分の幻想が生涯頭を離れず、煉瓦の面影の殆ど無くなってしまった銀座へ屢々歩を運んで、デパートの大建築をアルプスと観じ、陳列された美しい品物を御花畑とし、新しい事物に鋭利な批判を試みながら徘徊するのである。雪の降る宵の銀座を以て世にも美しい眺と云い、お伽話を想わせるような幻想的な雰囲気に包まれるなどと云っているのは、斯人が科学者の頭と詩人の心とを併有していた証拠

で、ジャズで踊ってリキュールで更かす銀座党はこんな事に無関心なのかもわからない。小山内薫に「草市の晩」という短篇がある。情話の世界に入るべきものではあるが、どこか淡々たるところがあって、その点が頭に残っている。尤も銀座を描く以上必ず酒と情痴の世界が展開されなければならぬと考えるのは、いささか捉われた見方で、国木田独歩の「号外」には女は一人も登場しない。

谷中

中根香亭に「天王寺大懺悔」というものがある。谷中の墓地に葬られた人々の幽霊が集って懺悔話をするという趣向で、島田一郎も出れば鷲津毅堂も出る。妖名を後々まで謳われた高橋お伝も出たと思う。子規の句に「猫の塚お伝の塚や木下闇」というのはこの谷中墓地を詠んだものであるが、大正年間に「ホトトギス」で子規の句輪講を試みた時、猫の塚が四足の猫でなく、仮名垣魯文が常に筆先で芸妓の悪口を云うところから、罪滅しに建てた洒落の碑石であることを知ってたのは鳴雪翁だけであ

った。今後は益々わからなくなって行くに相違無い。

幸田露伴の「五重塔」に感応寺の生雲塔と書いてあるのが、今でも天王寺墓畔に儼然と立っている五重塔のことである。当時露伴は谷中に住み、日夕この塔に親しんでいる間に「五重塔」の著想を得たのである。東京の五重塔がいくつか今度の戦火に亡びた中に在って、上野の丹塗の塔と谷中の白木の塔とは幸に無事であった。「西より瞻れば飛椽或時素月を吐き、東より望めば勾欄夕に紅日を呑んで、百有余年の今になるまで、譚は生きて遺りける」という「五重塔」巻尾の文句は、来ってこの塔

を仰ぐ者の脳裏に必ず蘇るであろう。仮にあの塔の亡びる日が来ても、露伴の名作の生命はまだまだ続くかも知れぬ。

谷中には鋳金家の岡崎雪声をはじめ美術家の住居が少くない。初音町に住んでいた大野洒竹の処に佐々醒雪、田岡嶺雲、笹川臨風というような人達が集って、筑波会なるものが成立ったのも、明治俳諧史の一節に記さるべき事柄である。大正の末には北原白秋が谷中に住んで、「移り来てまだ住みつかず白藤のこの垂房も短かかりけり」「くろぐろと木ずゑかがよふ星月夜御院殿坂をひた

ぶるのぼる」「墓原の花すてどころ目につきて南天の実の数冴ゆるなり」というような歌を多く遺している。その頃白秋の書いた随筆に、谷中の墓地のどこかに白秋という人の墓があると書いてあった。

目黒

芥川龍之介をして「何度読み返しても飽かざる心ちす」と評せしめた「病牀六尺」の文章は目黒の牡丹亭の一条であった。子規が古洲（古島一雄）と二人で牡丹亭を出

ると、十七八の美人が小田原提灯を点じて送って来た。

この時の趣は二六時中病苦に責められる晩年に至るまで忘れることが出来ぬ、と子規は云っている。子規から古洲に寄せた書に、「筍や目黒の美人ありやなし」とある一句は、この時の事を想い浮べたものである。

牡丹亭より二年後、即ち明治二十九年の秋にも、子規は目黒に遊んだ。同年の「寒山落木」の首に、「秋、諸友ニ伴フテ目黒ニ遊ビ栗飯ヲ喰ヒテ帰ル。快甚」という日記がある。子規は歩行が不自由になって人力車に乗って来た。

この時分の目黒の模様は到底今日からでは想像も出来ない。川上眉山は「ふところ日記」の旅に出るに当り、二葉亭と共に牛込駅から汽車に搭じて目黒の大黒家という宿に除夜を過し、元日の夕方都門を発している。二葉亭は更にその宿にとゞまって筆を執るというのだから正に隔世の感がある。

三十一年の秋、後藤宙外が広津柳浪と目黒辺を散歩していると路傍の草の上に二三寸の毛糸が落ちていた。柳浪は「何か出来そうだ」と微笑しながら、それを快に入れて歩き出したが、やがて先ず「もつれ糸」一篇が成り、

次いで「骨ぬすみ」「目黒小町」を書上げた。これなどは目黒に関する挿話の中でも変った材料の一であろう。

目黒に競馬場が出現したのは大分後であるが、競馬全盛の今日から見るとかなり遠い昔と云わなければならぬ。小山内薫は「落葉」の中に「秋晴の空を汚して、砂烟が濛々と立つてゐる。蟻のやうな人の列。その中を人力車が行く。自動車が走る。競馬場へ。競馬場へ――」と書いた。

根岸

根岸党と称せられた饗庭篁村、須藤南翠、森田思軒、高橋太華、幸堂得知、宮崎三昧等の名は現代人には大分縁遠いようである。芥川龍之介は嘗て、

根岸に饗庭篁村あり、又正岡子規ありしは明治年間の好一対なるべし。蕪村の句に曰、「菜の花や月は東に日は西に」と。子規は即ち昇らんとする月、篁村は即ち沈まんとする――或は既に沈みたるの日のみ。

と述べたことがある。篁村と子規とは同時に根岸に居住

していたかどうか知らぬが、両者の間には別に交渉は無かった。但根岸党の一人たる幸堂得知は子規と多少の交渉があり、後々まで音無川のほとりに住んでいたかと思う。

併し根岸党なるものは根岸に住んでいたまでで、その作品にどれだけ根岸に関するものがあるかは疑問である。子規の作物に至っては明に根岸文学で、殊に病臥一室を出でざる晩年のものは殆ど皆根岸の片影だと云っても過言ではあるまい。彼の文学的事業は悉く根岸の僑居に成り、その作品は随所に根岸的要素を含んでいる。彼

に源を発する文学を根岸派と称するのは、篁村以下の人々を根岸党と呼ぶより遥に内面的な意義を有する。根岸を記念する文学者として、彼以上の人が無いのは固より言を俟たぬ。

子規が根岸に居を定めたのは陸羯南との因縁による。羯南の旧居は戦争中まで昔のまゝに残っていたが、遺族が他に移り、その家も子規庵と同じく烏有に帰した。子規庵の前面にあった中村不折邸も同時に焼失し、彼の遺業たる書道博物館だけが現存している。不折が根岸に住むようになったのも恐らく羯南、子規の関係からであろ

う。不折以外にも画人の家が多かったが、今はその名残もとゞめていない。

岡野の汁粉屋が一変して耳鼻咽喉の病院になり、長塚節も暫く入院していたことがある。「病中雑詠」の大半はこゝに成ったのである。

芋坂下の名物の団子屋は泉鏡花をして「松の声」の一篇を草しめた。土地の狭い割に昔からのものが多く、文学的材料に用いられる機会も少くなかったが、近年は次第に姿を消しつゝあった。必ずしも昭和二十年四月の戦火によって一時に亡びたわけではないのである。

神楽坂

震災を免れたため、下町が復興するまでの間、特に繁華を示した神楽坂も、今度の戦火で全く亡びてしまった。両側の店の明るい灯影の中に夜店が立って、幅の狭い道をぞろぞろと人の往来するあの町も、何時になったら旧に復するか、今になって考えるといろいろ連想に上ることが多い。

横寺町の先生と云われた紅葉の家は、神楽坂を上って肴町の電車通を突切ってから、左へ曲ったあたりに在っ

たらしい。あの辺で育った友人などは、子供の時分に太弓場で弓を引く紅葉を見かけたことがあるそうである。紅葉中心の世界が神楽坂に及ぶのは当然であろう。「紅白毒饅頭」に出て来る縁日の描写は、毘沙門の縁日の夜に出かけて行って、ノートに書止めた材料を使ったのだという。御供についた泉鏡花が玄関番になって間も無い頃で、紅葉もまだ二十五歳の若い盛であった。

鏡花の書いたものに神楽坂が現れるのは珍しくない。彼が半生を回顧すれば、はじめて文学の上に立脚地を与えられた横寺町時代の事が、何よりもなつかしく浮んで

来る筈だからである。「春著」という随筆には、紅葉を中心とした当時の世界――未だ志を得ざる門下の士の生活が浮彫のように描かれている。その中に一人混っていた後藤宙外、この人の「明治文壇回顧録」の中にも神楽坂附近の消息に触れたものが屢々ある。

漱石の小説は「三四郎」を最後として本郷から離れた観がある。これは早稲田南町に移った結果であるが、彼としては自分の生れた町の近くに帰ったわけであった。「それから」の中で深夜神楽坂にさしかゝって強い地震を感ずる一条は、彼自身の経験であることが日記によっ

て証せられる。

主人公の書生が「今夜は寅毘沙ですぜ」という寅毘沙なるものは紅葉が「紅白毒饅頭」に用いた毘沙門の縁日なので、常でも人通りの多い神楽坂が、この夜は一層の賑を呈するのである。

「早稲田派の忘年会や神楽坂」という子規の句は明治三十一年の作である。抱月、宙外、筑水、梁川等が「早稲田文学」に筆陣を張った頃であろう。「藁屋や寄席の帰りの冬の月　五城」という句の藁店は昔の寄席で、そのあとが後に牛込演芸館になった。この演芸館のことは「そ

れから」の書生も口にしているが、今日ではちょっと説明のしようが無い。文学に現れたところによって、過去の歴史を辿る外はあるまいと思う。

日本文学電子図書館

文学・東京散歩

著　者：柴田宵曲
制作者：宮澤一郎
底　本：漱石覚え書
中公文庫、中央公論新社
2009年９月25日 初版発行

日本電子文学図書館